一般論文

対話場面における聴き手の表情の有無が話し手の気分に及ぼす影響

―話し手の性格との関連で―

Effects of Listener's Facial Expression in the Dialog on Speaker's Mood : In Relation with the Speaker's Character

村松愛美*，野中弘敏
Ami MURAMATSU, Hirotoshi NONAKA

概　要

本研究では，対話場面における非言語的情報としての聴き手の表情の有無が，話し手の気分変化，「聴いてもらえた」満足感および聴き手に対する印象に及ぼす影響について，話し手の性格との関連で考察することを目的として，性格特性及び気分状態についての質問紙検査の後，聴き手の表情が見える／見えないの２条件で面談を行い，面談後に再び気分状態・聴き手の印象・「聴いてもらえた」感について質問した。主な結果として，聴き手の表情の有無に関わらず「緊張・不安」「自信喪失・抑うつ」「敵意・怒り」「意欲低下・疲労」の気分が有意に和らいだ。また「敵意・怒り」「意欲低下・疲労」は表情有無の両群を通じて有意に和らいだ一方，「緊張・不安」は「表情なし」群で，「自信喪失・抑うつ」は「表情あり」群でのみ有意に和らぎ，基調となる気分によって非言語的な変数としての表情の効果が異なる可能性が推測された。

Ⅰ．問題と目的

筆者（村松）は，これまでの保育活動を通じて，保育士と非言語的コミュニケーションの間に密接な関係があるのではないか，と考えることが多かった。それは，保育士が表情豊かに関わろうとするほど，子どもたちはその保育士との関わりに引きこまれていくと経験的に感じてきたことによると思われる。

私たちが生活していく中で，他者とのコミュニケーションはなくてはならないものである。そこでは，音声や書字による言語を用いた情報伝達（言語コミュニケーション）だけでなく，視線や音声の抑揚・大きさ，顔面表情，身振り・姿勢や動作，身体接触，空間行動，服装や化粧，さらには匂いやインテリアなど，言語以外の多岐にわたる情報（非言語コミュニケーション）も用いられており，これらの非言語的行動がより円滑なコミュニケーションのために大きな比重を占めることは広く知られている（髙木，2006）。

特に表情は，非言語コミュニケーションの中でも最も古くから大きな関心を集め，今日に至るまで様々な方法で研究が行われている。例えば井上・石川（2011）によれば，大学生によるピアカウンセリングの結果，緊張・不安，抑うつ，怒り・敵意，疲労，混乱の気分が有意に減少した一方，活気が有意に増加した。また，カウンセラーに対する好感や信頼感がみられた場合の理由を

*　山梨学院短期大学専攻科保育専攻

「言語内容」「準言語」「非言語」およびそれらの「複合的雰囲気」に分類したところ，「非言語」に関する記載，とりわけ「笑顔」が6割強を占め，相手との信頼関係を築く上での非言語的要素，特に笑顔の重要性が確認されている。

上述の研究のように，実際の面接場面を設定し，そこでの被験者（話し手）側の気分の変化などからコミュニケーションにおける非言語的要素の効果を検証しようとする試みはこれまでにも行われているものの，話し手が持っている性格特性の影響を加味した検証は少ない。

そこで本研究では，対話場面における聴き手の表情という非言語的な情報の手がかりの有無が，面談前後の話し手の気分の変化にどのような影響を及ぼすか，さらに，聴き手の「聴いてもらえた」という満足感や聴き手に対する印象に及ぼす影響について，話し手の性格との関連も含めつつ考察する。

Ⅱ．研究方法

Ⅱ－1　対象

19歳から22歳の男女合わせて30名

Ⅱ－2　実施時期

2012年8月26日から2012年9月1日

Ⅱ－3　調査手続き

⑴　まず，被験者（以下「話し手」）の性格特性5因子を測定するBig Five尺度（和田，1996）の60項目に「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」の7肢選択式で，同時に横山・荒記（1994）による面接前の気分を測定するための日本語版POMS短縮版（以下「POMS」）の30項目に「まったくない」から「非常に多くある」の5肢選択式で，それぞれ回答を求めた。

⑵　次に，話し手に「あなたの趣味について」「あなたの性格について」「学生生活で頑張ったこと・頑張っていること」「今後やりたいこと・将来の目標」の話題から1つ以上を選択してもらい，10分程度自由に話してもらった。調査者（以下「聴き手」）は，相づちを打つ（「うん，うん」），話し手の言葉を繰り返す（「～したんですね」），軽く聴き手を促す（「それでどうなりました？」）などの発話を除き，基本的に話し手の話を傾聴する姿勢に徹した。その際，聴き手がマスクを着けることにより目以外の表情が定かでない条件（以下「「表情なし」群」），及びマスクを着けずに面談を行う条件（以下「「表情あり」群」）の2条件を設定した。なお「表情なし」群のマスクは，話し手が面談前のPOMSに回答している間に着用した。

⑶　面談終了後，面談前と同じ質問からなるPOMSへの回答，および「聴き手の印象はどれくらいよい・悪いと感じたか」「聴き手があなたの話をどれくらいよく聴いていた・いなかったと思うか」の質問（各9段階）への回答を求め，聴き手の印象と「聴いてもらった」感についてはその理由を自由記述してもらった。

Ⅱ－4　結果の処理

結果の量的処理にはPASW® Statistics 17.0およびMicrosoft® Office Excel 2003を用いた。

Ⅲ．結果・考察

Ⅲ－1　受容的な傾聴による気分の変化

POMSは，回答時のⅰ「緊張・不安」，ⅱ「自信喪失・抑うつ」，ⅲ「敵意・怒り」，ⅳ「元気さ・躍動感」，ⅴ「意欲低下・疲労」およびⅵ「思考力低下・当惑」の6種の気分の高低について測定するものである。

まず，前後で，表情の有無に関わらず，どれくらい気分の変化がみられたかを検討するため，POMS 6因子それぞれについて，各因子を代表する項目の正負をそろえた粗点の合計を「気分得点」とし，面談前と面談後のそれぞれについて6因子の気分得点を算出した。そして，面談前と面談後の各因子の気分得点の平均をt検定により調べたところ，「緊張・不安」($t=-2.393, p<0.05$)，「自信喪失・抑うつ」($t=-3.261, p<0.01$)，「敵意・怒り」($t=-4.980, p<0.01$)，「意欲低下・疲労」($t=-3.729, p<0.01$) の4つで有意な差がみられた（表1）。

ネガティブ（不快）な気分に属する因子で，おおむね面談後の気分得点が面談前よりも低くなっていることから，面談前よりも面談後のほうが，緊張・不安・イライラした気持ち・意欲低下・疲れた，などの気分が有意に和らいでおり，自分の

気分得点（面談後）－（面談前）のｔ検定（表１）

	対応サンプルの差					ｔ値	自由度	有意確率 p（両側）
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の95％信頼区間 下限	上限			
ⅰ緊張・不安	－1.345	3.027	.562	－2.496	－.193	－2.393*	28	.024
ⅱ自信喪失・抑うつ	－1.300	2.184	.399	－2.115	－.485	－3.261**	29	.003
ⅲ敵意・怒り	－1.467	1.613	.295	－2.069	－.864	－4.980**	29	.000
ⅳ元気さ・躍動感	－.233	2.775	.507	－1.270	.803	－.460	29	.649
ⅴ意欲低下・疲労	－2.333	3.427	.626	－3.613	－1.054	－3.729**	29	.001
ⅵ思考力低下・当惑	－.333	2.998	.547	－1.453	.786	－.609	29	.547

*：$p < 0.05$，**：$p < 0.01$。以下同じ

ことについて受容的に聞いてもらう経験自体が話し手の気分に良い影響を与えていることが確認された。

Ⅲ－２　非言語的情報としての表情の有無による気分の変化

次に，非言語的情報の有無が面談前後における気分の変化に影響を及ぼすかどうかを調べるため，６因子のそれぞれを代表する項目の正負をそろえた粗点を，面談前及び面談後のそれぞれについて因子ごとに合計し，面談後の得点から面談前の得点を引いて得られた得点をその因子における「気分変化得点」と名付けて，以後の考察を進める。なお，この気分変化得点は，唯一ポジティブ

「表情なし」「表情あり」各群の気分変化得点平均（表２）

表情		ⅰ 緊張・不安	ⅱ 自信喪失・抑うつ	ⅲ 敵意・怒り	ⅳ 元気さ・躍動感	ⅴ 意欲低下・疲労	ⅵ 思考力低下・当惑
なし	平均値	－1.00	－1.33	－1.33	－.80	－1.53	－.47
	度数	14	15	15	15	15	15
	標準偏差	1.664	2.526	1.952	2.455	1.727	1.807
あり	平均値	－1.67	－1.27	－1.60	.33	－3.13	－.20
	度数	15	15	15	15	15	15
	標準偏差	3.940	1.870	1.242	3.039	4.470	3.913

分散分析表（表３）

		平方和	自由度	平均平方	Ｆ値	有意確率
ⅰ緊張・不安×表情の有無	グループ間（結合）	3.218	1	3.218	.343	.563
	グループ内	253.333	27	9.383		
	合計	256.552	28			
ⅱ自信喪失・抑うつ×表情の有無	グループ間（結合）	.033	1	.033	.007	.935
	グループ内	138.267	28	4.938		
	合計	138.300	29			
ⅲ敵意・怒り×表情の有無	グループ間（結合）	.533	1	.533	.199	.659
	グループ内	74.933	28	2.676		
	合計	75.467	29			
ⅳ元気さ・躍動感×表情の有無	グループ間（結合）	9.633	1	9.633	1.262	.271
	グループ内	213.733	28	7.633		
	合計	223.367	29			
ⅴ意欲低下・疲労×表情の有無	グループ間（結合）	19.200	1	19.200	1.672	.207
	グループ内	321.467	28	11.481		
	合計	340.667	29			
ⅵ思考力低下・当惑×表情の有無	グループ間（結合）	.533	1	.533	.057	.812
	グループ内	260.133	28	9.290		
合計	260.667	29				

（快）な気分に属するⅳ「元気さ・躍動感」を除き，負の値になれば面談によりその気分が「軽減した」といえる。

その上で，面談前後の６因子の気分変化得点について，「表情なし」群と「表情あり」群との間で分散分析を行ったが，６因子のいずれにおいても有意な差はみられなかった（表２・３）。

そこで試みに，「表情なし」「表情あり」の各群ごとに，６因子の気分得点が面談の前後で変化したかどうかをｔ検定により調べた。その結果，「表情なし」群では，緊張・不安（t＝−2.248, p＜0.05），敵意・怒り（t＝−2.646, p＜0.05），意欲低下・疲労（t＝−3.440, p＜0.01）の因子に関して有意な差がみられた。また「表情あり」群では，自信喪失・抑うつ（t＝−2.624, p＜0.05），敵意・怒り（t＝−4.989, p＜0.01），意欲低下・疲労（t＝−2.715, p＜0.05）の因子に関して有意な差がみられた（表４・５）。

以上より，「敵意・怒り」と「意欲低下・疲労」の２つの因子については表情の有無に関わらず有意に和らいだ一方，「緊張・不安」は「表情なし」群でのみ，「自信喪失・抑うつ」が「表情あり」群でのみ，それぞれ有意に和らいでいた。これらの理由として，聴き手の表情が明らかでない場合は，聴き手の感情を推測するための情報的手がかりが少なくなる，つまり「聴き手にどう思われているか」を示す変数が減った分，それに張りつめた注意を向けずに済んだことで，緊張感が低まりかえって話がしやすくなる可能性が考えられた。逆に聴き手の表情が明らかな場合は，自信喪失して落ちこみがちな気分が，話しながらそのつど聴き手からの受容的な表情，というフィードバックがもらえることで，自分の語りについての手ごたえを確かなものにしていきやすくなり，それが話し手の自信へとつながることが推測された。

Ⅲ−３　気分についての各質問項目における気分変化得点の比較

次に，分散分析によりPOMS各質問項目における気分変化得点の差を「表情なし」群と「表情あり」群と間で比較した。

⑴　まず，「あれこれ心配だ」の質問項目で，表情なしの場合に「あれこれ心配だ」という気分が増進した一方，表情ありの場合にはむしろその気分が軽減された（表６・７）。これは，聴き手から表情による反応が得られないまま，「話していることあっているかな」「きちんと話せているかな」など心配しながら面談をして

「表情なし」群における気分得点（面談後）−（面談前）のｔ検定（表４）

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率（両側）
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の95%信頼区間				
				下限	上限			
ⅰ緊張・不安	−1.000	1.664	.445	−1.961	−.039	−2.248*	13	.043
ⅱ自信喪失・抑うつ	−1.333	2.526	.652	−2.732	.066	−2.044	14	.060
ⅲ敵意・怒り	−1.333	1.952	.504	−2.414	−.252	−2.646**	14	.019
ⅳ元気さ・躍動感	−.800	2.455	.634	−2.160	.560	−1.262	14	.228
ⅴ意欲低下・疲労	−1.533	1.727	.446	−2.489	−.577	−3.440**	14	.004
ⅵ思考力低下・当惑	−.467	1.807	.467	−1.468	.534	−1.000	14	.334

「表情あり」群における気分得点（面談後）−（面談前）のｔ検定（表５）

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率（両側）
	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	差の95%信頼区間				
				下限	上限			
ⅰ緊張・不安	−1.667	3.940	1.017	−3.849	.515	−1.638	14	.124
ⅱ自信喪失・抑うつ	−1.267	1.870	.483	−2.302	−.231	−2.624*	14	.020
ⅲ敵意・怒り	−1.600	1.242	.321	−2.288	−.912	−4.989**	14	.000
ⅳ元気さ・躍動感	.333	3.039	.785	−1.350	2.017	.425	14	.677
ⅴ意欲低下・疲労	−3.133	4.470	1.154	−5.609	−.658	−2.715*	14	.017
ⅵ思考力低下・当惑	−.200	3.913	1.010	−2.367	1.967	−.198	14	.846

項目「あれこれ心配だ」における各群の気分変化得点平均（表６）

表情なし	平均値	.20
	度数	15
	標準偏差	.775
表情あり	平均値	−.47
	度数	15
	標準偏差	.834
合計	平均値	−.13
	度数	30
	標準偏差	.860

分散分析表（表７）

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
あれこれ心配だ×表情の有無	グループ間（結合）	3.333	1	3.333	5.147*	.031
	グループ内	18.133	28	.648		
	合計	21.467	29			

いたためと考えられるのではないだろうか。一方，聴き手の表情を確認しながら話せた場合は，心配な気分が和らいだという可能性が考えられる。

⑵　また，「精力がみなぎる」では，聴き手の表情が見えている場合に「精力がみなぎる」という気分が増進し，表情が見えない場合には軽減された（表８・９）。これは，聴き手の表情が読みとれない場合には，興味をもって聞いてくれているか，聴き手にどのように伝わったか，話し手が判断するのが難しいため，積極的に話しづらくなり，「頑張って話そう」「伝えよう」という気分が，軽減されたためと考えられる。一方，聴き手の表情が見えている場合には，聴き手の受容的な態度や関心を表情からも読みとり，「もうすこし話そう」と積極的な気分が増進されたのであろう。

⑶　さらに，「がっかりしてやる気をなくす」の質問項目で，「表情なし」群では「表情あり」群より有意にその気分が和らいでいた（表10・11）。これは，もともと「がっかりしてやる気をなくす」気分が強く，「失敗ばかりしてしまう」「話しても上手に話せないだろうな」などの気持ちも強まって自信がない状態で話した時に，表情が見えないほうが，聴き手の表情を気にせず話せることが影響していると考えられる。それに加えて，自分の言動に自信が持てない場合には，自分の満足感よりも他者からの評価に重きを置きたくなりやすいことも背景に挙げられるのではないか。それに対して聴き手の表情が明らかな場合には，一般に受容的な眼差しが向けられている，つまり話し手に対して聴き手の気持ちが向いている感覚が，表情が定かでない場合より強まることが推測される。この印象の違いも，聴き手の表情を気にせず話せたかどうかを左右する要因のひとつとなるのではないだろうか。

項目「精力がみなぎる」における各群の気分変化得点平均（表８）

表情なし	平均値	−.40
	度数	15
	標準偏差	.737
表情あり	平均値	.20
	度数	15
	標準偏差	.561
合計	平均値	−.10
	度数	30
	標準偏差	.712

分散分析表（表９）

		平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
精力がみなぎる×表情の有無	グループ間（結合）	2.700	1	2.700	6.300*	.018
	グループ内	12.000	28	.429		
	合計	14.700	29			

項目「がっかりしてやる気をなくす」における各群の気分変化得点平均（表10）

表情なし	平均値	−.73
	度数	15
	標準偏差	.704
表情あり	平均値	−.27
	度数	15
	標準偏差	.458
合計	平均値	−.50
	度数	30
	標準偏差	.630

分散分析表（表11）

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
がっかりしてやる気をなくす×表情の有無	グループ間（結合）	1.633	1	1.633	4.635*	.040
	グループ内	9.867	28	.352		
	合計	11.500	29			

Ⅲ－４　非言語情報としての表情の有無による印象の差異

「聴き手の印象は，どれくらいよい・悪いと感じましたか。」という質問に「とても良い」から「とても悪い」までの９段階で，「聴き手は，あなたの話をどれくらい良く聴いていた・聴いていなかったと思いますか」という質問に「とてもよく聴いてくれた」から「全く聴いていなかった」までの９段階でそれぞれ回答してもらった結果，「表情なし」群と「表情あり」群との間に統計的な有意差はなかったが（表12・13），「表情なし」群より「表情あり」群の方が，わずかながら話し手の聴き手に対する印象も聴いてもらった感じも高かった。さらに回答者を増やすことにより検討することが課題であろう。

Ⅲ－５　性格の BIG FIVE ５因子と気分変化との相関

最後に，表情の有無をこみにして，Big Five 尺度から得られた性格特性と気分変化得点との関連があるかどうか，考察を加えておく。

性格特性の５因子について，それぞれを代表する項目の正負をそろえた粗点の因子ごとの合計と，６因子の気分変化得点について相関を調べてみると，「誠実性」と「自信喪失・抑うつ」（r＝0.401, p＜0.05）および「調和性」と「思考力低下・当惑」（r＝0.456, p＜0.05）との間で有意な正の相関が，「情緒不安定性」と「緊張・不安」（r＝－0.529, p＜0.01）および「情緒不安定性」と「思考力低下・当惑」（r＝－0.619, p＜0.01）の間で有意な負の相関がみられた（表14）。

まず誠実性が高い人ほど自信喪失・抑うつの気分が増進したのは，聴き手に対し折り目正しく話をしようとしていた真面目な話し手ほど，面談10分間を振り返り「きちんと話せていただろうか」「もっと違う言い方があったのに」と自身の達成感が揺らぎやすく，その分沈んだ気持ちにも抱きやすいためだと考えられた。また調和性が高い人ほど思考力低下・当惑が増進したのは，調和性の

「聴き手の印象」・「聴いてもらえた感じ」の各群平均値（表12）

		聴き手の印象	聴いてもらえた感じ
表情なし	平均値	7.93	8.40
	度数	15	15
	標準偏差	.884	.737
表情あり	平均値	8.33	8.67
	度数	15	15
	標準偏差	.724	.724
合計	平均値	8.13	8.53
	度数	30	30
	標準偏差	.819	.730

分散分析表（表13）

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
聴き手の印象×表情の有無	グループ間（結合）	1.200	1	1.200	1.839	.186
	グループ内	18.267	28	.652		
	合計	19.467	29			
聞いてもらえた感じ×表情の有無	グループ間（結合）	.533	1	.533	1.000	.326
	グループ内	14.933	28	.533		
	合計	15.467	29			

性格5因子と気分変化6因子の相関係数（表14）

気分変化得点	BIG FIVE 各得点（粗点）	Ⅰ外向性	Ⅱ情緒不安定性	Ⅲ開放性	Ⅳ誠実性	Ⅴ調和性
ⅰ緊張・不安	Pearson の相関係数	−.134	−.529**	−.127	.154	.307
	有意確率（両側）	.495	.003	.511	.424	.106
	N	28	29	29	29	29
ⅱ自信喪失・抑うつ	Pearson の相関係数	−.154	−.344	−.060	.401*	.028
	有意確率（両側）	.426	.063	.755	.028	.885
	N	29	30	30	30	29
ⅲ敵意・怒り	Pearson の相関係数	−.109	−.031	.058	.138	.074
	有意確率（両側）	.572	.871	.760	.467	.704
	N	29	30	30	30	29
ⅳ元気さ・躍動感	Pearson の相関係数	.146	.185	.154	−.044	−.343
	有意確率（両側）	.449	.328	.417	.817	.068
	N	29	30	30	30	29
ⅴ意欲低下・疲労	Pearson の相関係数	−.127	−.342	−.136	.140	.229
	有意確率（両側）	.513	.064	.473	.462	.232
	N	29	30	30	30	29
ⅵ思考力低下・当惑	Pearson の相関係数	−.141	−.619**	−.303	.212	.456*
	有意確率（両側）	.465	.000	.104	.260	.013
	N	29	30	30	30	29

高い人が，聴き手が望んでいることに合わせて話そうと配慮することで，「このような話で聴き手の期待に沿えているのだろうか」という懸念も高まりやすいことを示唆していると考えられた。

一方，情緒不安定性が高い人ほど面談によって緊張・不安や思考力低下・当惑が低減したのは，情緒不安定性の高かった人が，受容的な聴き手と話すことで気持ちが落ち着き，それに伴って緊張や不安などの気分が和らぐと同時に，考えや気持ちを整理しながら話す余裕が生じたことによることが考えられた。

Ⅳ．まとめ

本研究では，非言語情報としての面談時の聴き手の表情が，面談前後の気分の変化に及ぼす影響について検討した。その結果，面談前後に行ったPOMSでは，表情あり・なしに関わらず，「緊張・不安」「自信喪失・抑うつ」「敵意・怒り」「意欲低下・疲労」の気分の改善がみられた。このことから，自分のことについて受容的に聞いてもらう経験自体，話し手の気分に良い影響を与えていることが改めて確認された。

次に，「表情あり」「表情なし」の各群ごとに，6因子の気分変化得点が面談の前後で変化したかどうかを調べ，非言語的情報の有無が面談前後における気分の変化に及ぼす影響を検討した。結果，「敵意・怒り」と「意欲低下・疲労」の2因子については表情の有無に関わらず有意に和らいだ一方，「緊張・不安」は「表情なし」群でのみ，「自信喪失・抑うつ」が「表情あり」群でのみ，それぞれ有意に和らいでいた。このことから，緊張感が高いときには，表情という非言語的な情報の手がかりが少なくなることで話がしやすくなる一方，自信喪失感が高い場合は，話しながらそのつど聴き手からの表情のフィードバックがもらえることで自分の語りについての手ごたえを確かなものにしていきやすくなる可能性が考えられた。

また，話し手の聴き手に対する印象や聴き手にどれくらい聴いてもらえたと感じたかについては，全体的に印象が良く，よく聞いていてくれたと感じていて，表情の有無による有意な差はみられなかったが，いずれもわずかに「表情あり」群の方が「表情なし」群より高く，今後のさらなる検証が必要と考えられた。

最後に，Big Five 尺度による性格特性と気分変化得点との相関をみてみると，情緒不安定性が高い人ほど，緊張・不安が和らぎ，思考力低下・

当惑が和らいでいた。また，誠実性が高い人ほど，自信喪失・抑うつの気分が増進した。

一般に，コミュニケーションは表情豊かに行われるのが良いとされているが，今回の研究で，必ずしもそのように単純には言い切れない可能性が示唆された。例えば，落ちこんだり，がっかりする気分を持ちやすい傾向にある人の場合には，聴き手の表情という非言語情報が，かえって聴き手の様子をうかがうための変数を増やすこととなり，話すことへの負担感が増して，結果的に落ちこみやがっかりする気分が増進してしまう可能性も考えられた。この点のさらなる検証を含め，聴き手の表情という非言語情報が，ネガティブな気分を持ちやすい人にどのような影響を及ぼすかを調べる，より有効な手立ての検討が今後の課題となるであろう。

文　献

井上清子・石川洋子（2011）必修授業における上級生から下級生へのピアカウンセリングの試み：その効果と考察(1)　文教大学教育学部紀要，45，13–20

McNair DM, Lorr M and Droppleman LF（1992）Profile of Mood States. Educational and Industrial Testing Service, San Diego

中谷恵子・待田昌二・東豊（2012）心理臨床場面におけるセラピストの非言語行動の定量化：カウンセリング実習における面接評価との関連　神戸松蔭女子学院大学研究紀要（人間科学篇），1，45–60

高木幸子（2006）コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割　早稲田大学院文学研究科紀要，51，25–36

和田さゆり（1996）性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成　心理学研究，67(1)，61–67

横山和仁，荒記俊一（1994）日本語版POMS検査用紙　金子書房

付記

本論文は，平成24年度大学評価・学位授与機構提出論文に加筆・修正を行ったものである。